

読書活動推進NEWS

1か月に平均12.4冊

福島県教育委員会の調査で、昨年度の県内小・中学生の1か月間の読書量が過去最多だったことがわかりました。小学生は平均12.4冊、中学生は2.9冊。また、1冊も読まない「不読」の子が減ったこともわかりました。

様々な制約がある中で、読み聞かせボランティアや図書支援員のみなさん、そして先生方が、工夫して本の楽しさを伝え続けてくださった成果だと思えます。



厚労省の「第8回21世紀出生児縦断調査結果概況」では、「親がよく本を読む家の子供は、本をたくさん読む傾向にある」ことも明らかになっています。ステイホームの中で、親子で本を読む時間が生まれたのかもしれません。

イギリスでは「読書は、コーヒープレイクや散歩、ゲームなどよりもストレスを軽減する効果が高く、長生きにつながるという研究結果が出されています。



ご家庭にはどんな本棚がありますか？
本の置き場所は、家族別々でしょうか？

親子で、そしておじいちゃんおばあちゃんとも共有するような素敵な本棚をつくって、今後もしばらく続きそうなおうち時間を、家族みんなで読書を楽しんでみてはいかがでしょうか？

社説

子どもの読書

本を最後まで読み切れなくて構わない。子どもたちが積極的に読み、世界観を広げられるよう、大人は読書環境を整えたい。
筑波大付属小で国語を教える白坂洋一さんは著書「子どもを読書好きにするために親ができること」で、従来の考え方や成功例が当てはまらない「正解のない時代」を生きたるために、読書が必要だと指摘する。本を通して他者と交流する経験が、自ら問いを見いだし、最適解を導き出す能力を身に付けることにつながる」と説く。
社会の変化は激しく、価値観の多様化は進む。絵本や童話、小説、評論、図鑑など幅広いジャンルの本を読み、他者を理解する力や論理的に物事を考える力を養う

必要がある。
県教委が行った2021年度の児童生徒の読書調査によると、1カ月の平均読書冊数は小学生が12.4冊、中学生が2.9冊で過去最多となった。高校生は前年度と同じ1.6冊だった。1カ月に1冊も読まなかった「不読」の割合は、小学生が1.3%で前年度と変わらず、中学生が前年度比4.4%減の11.6%、高校生が同1.8%減の39.1%となった。
新型コロナウイルスの感染拡大で活動が制限される地域ボランティアに代わり、図書委員や教職員

本の楽しさに触れる環境を

不読の理由では、読書よりも「スマートフォン・携帯などのほうが楽しい」という回答が増加傾向にある。趣味や娯楽を目的とする、青少年のインターネットの利用時間は毎年増えているという国の調査が出ている。
読書習慣のない子どもに、本を

が読み聞かせをするなどして、子どもの読書意欲に応えたことが読書量の増加や、不読率の低下につながったとみられる。感染防止対策を取りながら、子どもたちが本と出合う機会を増やしていくことが求められる。
県内では乳幼児の健診に合わせ、読み聞かせや書評の発表力を競う「ピリオパトル」など、読書活動の推進に力を入れている。
読書の楽しみを一度知れば、いつか読まなくても、また本を手にすることは難しくないだろう。幼少期から切れ目のない支援で読書の楽しさを伝えてほしい。